「神がその民を訪れてくださった」

年間第 10 主日・C年（16.6.5）

主のことばは実現する

早速、今日の第一朗読ですが、北のイスラエル王国と南のユダ王国の約 400 年に渡る歴史を語る列王記からとられております。

ちなみに、今日の個所に登場する異邦人の住むシドンのサレプタの貧しいやもめですが、預言者をとおして感動的な奇跡を体験した人物にほかなりません。そのエピソードは、今日の個所のすぐ前の段落で次のように報告されております。

「彼女は答えた。『あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪（たきぎ）を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。』エリアは、言った。『恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、ますそれでわたしのために小さいパン菓子（がし）を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで

壺の粉は尽きることなく

瓶の油はなくならない。』」（列王記上 17.12-14）

この預言者エリアの言葉は見事に実現したので、壺の粉は尽きることなく、油もなくならなかったのであります。まさに預言者の口をとおして語られた神のことばに対する全面的な信仰が引き起こした奇跡にほかなりません。

そこで、今日の朗読箇所が後日談として続くのですが、一旦死んでしまった一人息子を、エリアが生き返らせてくれた奇跡を体験したこの貧しいやもめは、

「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主のことばは真実です。」と、見事に信仰告白ができたのであります。

このように、神の憐れみは、預言者のことばによって出来事として実現することが、すでに旧約聖書で語られた典型的なエピソードと言えましょう。

深く憐れんで

したがって、今日の福音は、その延長線上にあるメシアによる神のいつくしみを示す、

これまた感動的な奇跡物語と言えるのではないでしょうか。

ちなみに、ルカは今日の出来事を語るとき、特別な言い回しを使っています。それは、

「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくてもよい』というくだりにほかなりません。

ここで、イエスを**「主」**と呼んでおりますが、この称号は、すでに旧約聖書では、まず創造主なる神に対して主と呼んでおりますが、特に神の民を導く主なる神を表わしております。

さらに新約では、まさにイエスの対する信仰告白として「イエスは主である」（一コリント 12.3）と宣言し、イエスを神とし、信仰の対象、礼拝の対象としての確信から使われるようになりました。

ですから、ルカが、ここでイエスの代わりに**「主」**と呼んだのは、初代教会のイエスに対する信仰を意識したからと言えましょう。

つぎに、**「あわれに思い」**という言い回しですが、今日の「仙塩 8 教会お知らせ」にも書きましたように、福音書では 12 回使われており、しかもイエスと御父に関してのみの言い回しであります。ちなみにギリシャの語源からその意味を探るならば、まさに神の内臓からほとばしる強烈な情感を表わする言葉なのであります。ヘブライ語では、憐れみを表わす言葉は、「ラハミム」ですが、それは神の胎内を意味します。ですから、御父の非常に深く、内的なそして限りなき豊かな情感を表わしているといえましょう。

神がその民を訪れた

ところで、ルカは、今日の奇跡的出来事を、次のように総括しております。

「人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、『大預言者が我々の間に現れた』と言い、また、『神はその民に心をかけてくださった』と言った。」と。

ここで、注目すべきは、**「神はその民に心をかけてくださった」**というくだりですが、すでにザカリアの賛歌では**「主はその民を訪れて解放し」（ルカ 1.68）**と歌われており、旧約時代に起こった神の訪れを暗示している、ギリシャ語では、「訪れ」をも意味する言葉なのであります。

ですから、旧約時代にイスラエルを訪れて購った神が、暗黒と死の陰に住む者を照らし、導く日の光となって再び訪れると預言したザカリアの言葉どおりに、イエスが訪れ、やもめのひとり息子を死からみごとに生き返らせた奇跡であると言えましょう。

ですから、人々が、この奇跡を目の当たりにしたとき、イエスを褒め称えるのではなく、神を賛美し、神がイエスをとおして訪れてくださったことに感動したのではないでしょうか。

あなたがたの父が憐れみ深いようにあなたがたも憐れみ深い者となれ

ところで、「いつくしみの特別聖年」当たって、特にルカ福音書で深く黙想することをお奨めします。ルカ福音こそ、イエスをとおして示される神の憐れみを強調しているからであります。

ですから、ルカは、「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」（同上 6.35d）とイエスの具体的な勧めの言葉を総括しております。ですから、わたしたちの憐れみ深い言動は、イエスの次のような戒めに従うことにほかなりません。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。」（同上 6.27b-29a）ちなみに乙女マリアが天使ガブリエルに向かって信仰告白をしたとき、彼女自身すでに神の憐れみを体験していたといえましょう。天使に向かって「わたしは主のはしためです。」（同上 1.38b）と宣言したとき、恐らく詩編の次のような祈りを思い浮かべていたからであります。

「ご覧ください、僕が主人の手に目を注ぎ　はしためが女主人の手に目を注ぐように
わたしたちは、神に、わたしたちの主に目を注ぎ　憐れみを待ちます。わたしたちを憐れんでください。主よ、わたしたちを憐れんでください。」（詩 123.2-3b）